

日本中國學會報 第六十七集
二〇一五年十月十日 發行 拔刷

中國小説における「女をさらう猿」の展開

仙石知子

中國小説における「女をさらう猿」の展開

仙石知子

はじめに

中國小説のなかには、「女をさらう猿」の話がある。それら一連の話は、小説『西遊記』の孫悟空の源流を探るなかで⁽¹⁾、あるいは、書家の歐陽詢との関わりをなかで、關心を集め、先行研究も少なくない。『西遊記』は猿の活躍する話であるが、一方で猿が人間の女をさらう話が、西晉から明という長い時代の中で受け継がれてきた。

人間が動物と交わる話のなかには、それを必要とした社會背景を持つものがある。たとえば、妻の死後に夫が再婚しない「不再娶」は、繼子がいない限り容認されないため、「不再娶」を語る話のなかでは、相手の女は人間社會の規範の適用されない幽霊や動物に置き換えられる⁽²⁾。また、富永一登によれば、動物が女に化ける異類婚姻譚は、男性對象を求める欲望の幻想化であり、對象となる動物は、鳥・鹿・狸・獺・狐など様々である。その中には唐の『袁氏傳』のように猿が女に化ける話もある、という。

本稿は、「女をさらう猿」の話の展開を検討することで、書かれた時代の社會背景により物語が書き換えられていく、という中國小説の

有する特徴の一つを文言・白話の別を超えて明らかにするものである。

一、異民族の象徴としての猿

猿が女をさらう最も古い話は、(前漢) 焦延壽『焦氏易林』に、次のように記される。

南山に大獲がいて、わが愛する妾を盗んだ。恐ろしくて敢えて追わず、獨りの宿に逃げ歸るしかなかった。

この話は、猿が女をさらう話の淵源であるが、後世展開される、猿の子供を産まされたり、猿と戦ったりする描寫は見られない。

猿の子供を産まされる話は、(西晉) 張華『博物志』に記される。

蜀の南にある高山の上に、獼猴のような生き物がある。背丈は七尺で、歩行できて走るのが速い。名を猴獍といい、一名を馬化といい、あるいは猴獍ともいう。道を行く婦女を見張つていて美しい者がいれば、そのたびに女をさらつていき、(いつさらわれたか) 人は知ることができなかった。行く者があるいはそのそばを通るたびに、互いの體を長繩で引き寄せてたが、それでも免れられなかった。この生き物は男子の氣を得ると自ずから死んでしまうの

で、そのため男はさらわれないのである。さらつてくると女房にする。年の若い者は、死ぬまで返ることができない。十年すると、姿形はその生き物に似てきて、意識もはっきりしなくなり、また家に歸りたいとは思わなくなる。子供を産んだものは、そのたびに一緒に家に送り返してくれる。産まれた子供はみな人の姿に似ている。(子供を) 育てないと、その母はそのたびに死んでしまう。だから育てない者はいないのである。成長すると、(子供は) 人と變わらなかつた。みな楊を姓とした。そのため今蜀の西に多い楊という姓の者たちは、おおむねみなこの猥獲・馬化の子孫で、時々猥の爪を持つものを見ることがある。

ここでは、猿(獼猴・猴猥・馬化・猥獲⁶)と女との間に、子供が産まれている。また、その子供は、成長すると人と變わらなくなり、みな「楊」姓を名乗る、という。そのため、いま蜀の西に多い「楊」という姓を持つ者は、その猿(猥獲・馬化)の子供たちで、時々猿(獲)の爪を持つものが見られる、とするのである。

渡邊義浩によれば、ここに出ている「楊」は氏族の楊茂搜を意識している可能性が高いという。張華の執政期には、氏族の齊萬年が皇帝を稱したことを機に江統が「徙戎論」を著している。そのように漢民族と雜住しつあつた氏族を代表とする異民族への排斥運動が盛んであつたことから、張華と關わりを持つた氏族の楊茂搜の影響をそこに見るのである。

張華の『博物志』は、このほか渡邊論文も掲げるように、越の「祝」の祖を「冶鳥」とし、吳では蟲の頭により飛ぶ人を記述するなど、異民族を鳥獸や昆蟲と關わらせる。そうした中で、猿は、氏族など西方の異民族の象徴とされている。猿が強制的に子供を産ませ、繁

殖を圖る物語は、西晉における異民族排斥を社會的な背景として、と言えよう。

『博物志』に見られた「女をさらう猿」の話は、(東晉)干寶の『搜神記』に繼承される。

蜀の西南にある高山の上には、猿に似たものがある。背丈は七尺で、人のように歩くことができ、走つて人を追いかけるのが得意である。名を猥國、一名を馬化といい、あるいは猥獲ともいう。道行く婦女を見張つていて美しい女がいたら、そのたびに女を連れ去つてしまい、人は知ることができなかった。もしそのそばを通り過ぎるときに、互いの體を長繩で引き寄せていても、なお免れることができなかつた。この生き物は男女の氣のにおいを嗅ぎ分けることができ、そのため女はさらうが、男をさらうことはないのである。もし娘を得られれば、妻にする。子供を産まない者は、死ぬまで家に返ることができない。十年すると、姿形はその生き物に似てきて、意志が混亂して、再び家に歸りたいとは思わなくなる。もし子供を産めば、そのたびに抱きかかえて家に送り返してくれる。産まれた子供はみな人の姿に似ている。(子供を) 育てないと、その母はそのたびに死んでしまう。よつてそれを懼れて、育てない者はいないのである。成長すると、人と變わらなかつた。みな楊を姓とした。そのため今蜀の西南に多い楊姓の者たちは、おおむねみなこの猥國・馬化の子孫なのである。

『搜神記』と『博物志』との違いは、三つある。第一に、『博物志』では、「男子の氣を得ると自ずから死んでしまう」とされていただけの猿が、『搜神記』では、「男女の氣のにおいを嗅ぎ分けることができ」とされ、猿の能力が高められている。猿が「男子の氣」によつ

て殺されない、すなわち人間の猿への優越性が取り拂われ、猿に男女を嗅ぎ分ける能力を附すことで、猿への蔑視を弱めているのである。

第二に、「年の若い者は、死ぬまで返ることができない」が、「子供を産まない者は、死ぬまで家に返ることができない」と書き換えられている。若ければ子供を産んでも歸れなかった『博物志』に比べ、子供を産めば返してくれる『搜神記』は、猿と人間との距離が幾分か縮められた表現となっている。

第三に、『博物志』の「時々攫の爪を持つものを見ることがある」という記述は削除された。これも、猿との間の子供への蔑視の低下と捉えることができる。もちろん、『搜神記』全體から言えば、異民族蔑視の傾向に変わりはない。それでも、猿に象徴される蜀の異民族への蔑視が低下しているのは、東晉がやがて蜀を回復していくことの反映と考えてよい(『晉書』卷九十八 桓温傳)。また、東晉は西晉に比べると、全般的に雑住が進展しており、さらに佛教の本格的受容も始まり、異民族との融和に特徴を持つ『春秋穀梁傳』の注釋を范寧が著すなど、異民族に對する排他性が西晉に比べると弱體化していた。

このように、漢代に起源を持つ「女をさらう猿」の話は、西晉の『博物志』になると、猿を異民族に準え、その同化に苦しむ漢族の思いを反映させる話となった。東晉の『搜神記』では、現實を反映して一定の融和が見られるものの、異民族への差別意識は繼承されていた。これが大きく變容するのは、鮮卑系の唐の成立を待たなければならなかった。

二、文化に造詣の深い猿

唐代になると、「女をさらう猿」の代表的作品である『補江總白猿

傳』(以下、『白猿傳』と略稱)が著された。『補江總白猿傳』という名稱は、陳の詩人であった江總の『白猿傳』を補う、という意味であるが、江總が『白猿傳』を書いた事實はない。『白猿傳』は、六朝志怪の特徴が残り、『古鏡記』と共に六朝から唐代傳奇への過渡期に位置付くとされる。以下あらすじを掲げよう。

陳の歐陽紇は美しい妻を伴い、中國南方に遠征中、白猿に妻をさらわれる。妻を取り返すため、山中に分け入り、東向きの石窟の中で白猿に捕らえられている女たちを發見する。彼女たちの話によると、妻もさらわれてきたという。さらに、女たちによると、白猿は、酔うと力を試したが、女たちに絹で手足を縛らせ、それを一氣に斷ち切るという。歐陽紇は、女たちから白猿の弱點を聞き、白猿を退治する。白猿は、歐陽紇に刺されると憤り嘆いて、「これは天がわたしを殺すのだ。おまえの力ではない。だがおまえの妻はすでに身籠もっている。その子を殺すな。その子は聖帝に逢い、必ず一族を繁榮させるはずだ」と言い遣して死ぬ。白猿が死に、藏の中を調べると、寶玉や貴重な品々がたくさん並べられていた。さらわれていた女たちは三十人ほどで、みな美人だった。女たちによれば、「白猿は、朝には手と顔を洗い、帽子をかぶり、白の袷を着て、素の薄絹の衣をまとって、寒さ暑さは感じないようだった。全身に白い毛が生えていて、長さは數寸であった。石窟にいるときはいつも木簡を讀み、その字は符篆のようであった。わたしにはまったく讀むことができなかった」とのことだった。また、白猿は死ぬ少し前に、「わたしは千年生きたが子供が無かった。それが今になってできたのは、死期が迫ったからに違いない」と言っていたという。歐陽紇は、妻と女たちを連れ、寶

を持つて家に歸つた。一年後、妻は一子を産んだ。その妻は白猿によく似ていた。その後、歐陽紇は陳の武帝に誅殺された。歐陽紇は以前より江總と親交があり、江總は歐陽紇の息子が聰明なのを氣に入り、引き取つて養育した。その子は大人になると學問を積み、書に優れ、世にその名を知られた。

『白猿傳』に登場する歐陽紇の子供とは、書家として名高い歐陽詢のことである。先行研究は、『白猿傳』が、歐陽詢を中傷する目的で書かれたのか、あるいはその出生を禮贊するために書かれたのか、といった作品の執筆動機を中心に論ぜられている¹⁴。しかし、『白猿傳』の執筆動機の考察には、たとえば、「牛羊日曆」に對して渡邊孝が行つたような¹⁵、史實に即した緻密な資料分析が必要である。『白猿傳』に關する資料は少なく、現段階では執筆動機を確定することは難しいであろう。そこで、執筆動機は取りあえず留保し、本稿の主題である「女をさらう猿」の展開に限定して検討したい。

『白猿傳』が、これまでの「女をさらう猿」の話と大きく異なる點は、猿が文化に造詣の深いように描かれることである。『白猿傳』の猿は、以前の話の猿よりも立派な風貌で、白の袷に薄絹の衣をまとい、いつも木簡を讀んでいる。「符篆」と表現されるその文字は、女たちには讀めなかつたとされる。また、死に臨んで、自らの一生を振り返り、その死の理由を天に求める。何よりも、猿の子供が「學問を積み、書に優れ、世にその名を知られる」とある記述が、歐陽詢を想起させる。それにより、『白猿傳』は、猿と人との混血種であっても、出世でき、成功するという思いを抱かせる。

このような文化に造詣の深い猿や、猿との間に産まれた子供についての隱喩は、唐の帝室が胡漢融合の鮮卑系混血種であり、黒人も行き

交うような世界帝國であつた、という唐の社會情勢が反映したものと考えられる。鮮卑族と漢民族の融合した關隴集團が母體となつて建國された唐は、異民族に對する差別意識が歴代國家の中でもとりわけ低かつた¹⁶。

『白猿傳』は、こうした唐の民族意識を反映して、それまで異民族を象徴していた猿の子供が、唐を代表する書家の一人である歐陽詢とされた。むろん、歐陽詢自身は異民族ではない。したがつて、歐陽詢の顔が猿に似ていたという事實が、物語の前提となつていた可能性は高い。それでも、ここには、猿に象徴される異民族との混血種への社會的な許容が窺われる。

猿が人間の女に子供を産ませる話は、『白猿傳』に代表されることで、異民族と漢民族との融合の象徴を猿の子供として描く必然性は終結する¹⁷。宋代になると、猿を異民族の象徴とする設定は繼承されるが、猿を退治する話が主流となつていく。

三、異民族との對峙と猿退治

『太平廣記』・『文苑英華』の編者として有名な北宋の徐鉉が書いた『稽神錄』には、妻をさらつた猿を退治する話が描かれる。

晉州の含山には妖鬼がおり、婦人をさらうことを好んだ。かつてある土人が含山へ行つた際、夜に妻を見失つた。朝になつて探し求め、山の奥深くへと入つた。一つの大きな石洞があり、五、六人の婦人が座つていて、「あなたはどうしてこちらへいらしたのですか」と尋ねた。その理由を詳しく話した。婦人は、「賢夫人は昨夜ここに來ました。石室の中にいます。私たちはみなさらわれ來てここにいます。將軍は人をさらつてここにきて、容成

と彭祖の術を手傳わせます。十日ごとに一度、素練を取つてその身と手足に巻き付け、作法通りに氣を運らせると、練はすべて断裂します。毎回一疋ずつ増やしていきます。明日は五疋を巻く日ですが、あなたは明朝にここへ来て様子を伺つてください。私たちは六疋を急いで奴の身體に巻き付けます。それを見たらあなたは来てすぐに奴を殺すとよいでしょう」と言つた。士人がその時に行くと、一人の容貌の非常に恐ろしい者が見えた。婦人たちが六疋目を巻き付けたので、そこですぐに進んでこれを殴り、かくてこれを殺すと、それは一匹の老猿であつた。そこで妻を取り返し、婦人たちもみな出ることができた。その怪異はなくなつた。

ここには、猿が女をさらうものの、女が猿の子供を宿すという記述はない。猿が行つていた「容成と彭祖の術」は、『博物志』巻五にも「容成 婦人を御すの法」と記される房中術である。それにも拘らず、唐以前の物語と異なり、猿が子供を産ませる記述はない。猿は、混血の對象ではなく、女をさらう敵對者としてのみ描かれるようになってくる。

異民族を象徴する猿を敵對者と考えるのは、北宋が建國以來、西夏や遼など異民族國家の侵入に苦しみ續けた國際狀勢を反映している。のちに西夏を建國する黨項族について、『隋書』卷八十三 西域 黨項傳は、次のように傳えている。

黨項羌は、三苗の後裔である。その種族には宕昌・白狼がある。

(かれらは) みな自ら獼猴の種族であると稱している。

黨項族は、『博物志』で猿に準えられていた氏族と同じ、チベット系の異民族である。西方の異民族を猿に象徴させる夷狄觀は、『隋書』が編纂された唐初には殘存していた。

また、(南宋) 周去非による中國南部の地理書である『嶺外代答』には、『白猿傳』の影響が殘る。

靜江府の山麓には、むかし猴がいて、數百歳で、神力で變化し、制することができなかつた。たくさんの婦人をさらつていた。歐陽都護の妻もまたさらわれた。歐陽は計略を使つて猴を殺し、妻を取り返し、(さらわれていた) 他の女性たちはみな尼となつた。猴の骨を洞窟に葬つたが、なお妖をなした。城北の家に向かい、人が(そのそばを) 通るたびに、必ず石を飛ばした。ただ歐陽と……²⁰⁾ いう姓の者が通ると、何も起こさず、猴の仕業だと分かつた。

猿が女をさらうのみならず、歐陽という姓の者が猿の悪さを止めるところに、『白猿傳』の影響を見ることができると、留意したいことは、猿が女をさらうものの、女がその子供を宿すと記述されていないことである。

宋代は、「華夷の別」を強く説く朱子學が成立するように、異民族との戦いが重視された。異民族との混血は歓迎されなかつたと考えてよい。こののちの猿退治が、多く人の手を借りることに對して、宋代の猿退治は自らの手により行われる。猿に象徴される異民族との對峙性の高さが分かる。『白猿傳』などと同じように妻がさらわれても、猿の子を産まされることはなく、ひたすら猿を打倒することが優先されていくのである。

四、猿退治の報奨

元末民初には、瞿佑が『剪灯新話』卷三に、「女をさらう猿」の話として「申陽洞記」を著している。「申陽洞記」のあらずじは、以下

の通りである。

隴西の李徳逢は、騎射が得意で豪勇な若者だと評判であった。

桂州には名山が多く、李は毎日、山へ入ってイノシシを射て生計を立てていた。桂州には錢翁という富豪がいた。風雨の激しい夜の夜のこと、錢翁の十七歳になる娘が行方知れずになった。八方手を盡くしても手がかりすらつかめず、錢翁は娘の身を案じ、「娘の居場所を知るものがいたら、財産の半分を與え、娘を妻にしてもよい」という誓約書を作った。しかし、半年経っても娘の居場所は分からなかった。

ある日、李はいつものように狩りをしていて、獲物を追って深い谷へ入ると日が暮れてきたので、偶然に見つけた古廟で休むことにした。やがて大勢の足音が聞こえてきたので、様子を窺っていると、紅い灯籠を提げた二人に先導された主人らしき者が、三山冠をかぶり、頭に紅い布を巻き、淡い黄色の上衣に玉帯という出で立ちでゆつくりと歩き、腰を下ろすのが見えた。従者は十餘名おり、手に武器を持っていた。顔は猿にそっくりだった。李はそこにいる者たちがみな猿の化け物だと分かると、三山冠をかぶった大猿に向かい矢を放った。矢は見事に命中し、大猿は驚いて逃げていった。

朝になつて李が血痕を辿って行くと、大きな穴に落ちた。李が穴の中の道を行くと洞窟があり、「申陽之洞」と門札に書かれていた。門番が数名いたが、その者たちはみな昨晩見た猿の化け物であった。門番が李を見つけ、驚いて「おまえは誰だ」と聞いてきたので、李は「わたしは下界の凡人で長いこと醫者をやっている者です。藥草を探りに山へ入り、道に迷つてここに來てしま

ました。どうか許してください」と言った。主人の大猿は、昨夜、負つた傷を治してもらいたいと李に頼んだ。李は毒を藥と偽り、「これを飲めば傷が治るだけではなく、不老長壽になります」と言つた。大猿の主人は喜び、疑うことなく毒を飲んだ。従者たちも求めてきたので、みなに飲ませた。やがて猿たちはバタバタと倒れ、李は劍でどめをさした。大猿の近くには三人の美女が控えていたが、やはり化け物だろうと思い、退治しようとする、美女たちは「自分たちは人間です」と泣いて訴えた。彼女たちは大猿にさらわれてきた良家の娘で、その中には錢翁の娘もいた。

出口が見つからず困っていると、數名の老人が現れた。粗末な皮衣を着て、長い髭を生やし、口は鳥のくちばしのように尖つている。彼らはこの洞窟の本來の住人である虛星の鼠の精であつた。彼らは洞窟を大猿たちに乗つ取られていたが、李が退治してくれたので深く感謝し、外に出る手助けをしてくれた。

李は三人の娘を連れて穴から出ると、まっすぐに錢翁の家へ向かつた。錢翁は大いに驚き喜んで、早速李を娘の婿に迎えることにした。他の二人の娘も家に歸したが、その家も娘を李に嫁がせたいと望んだので、李は三人の娘をみな娶り、錢翁の財産を得て、大金持ちになつた。

「申陽洞記」が、これまでの「女をさらう猿」の話と異なる點の第一は、主人公の李徳逢が、救出される女たちと、もともととの關係性を持たないことである。李徳逢は「偶然」猿の洞窟の側で休み、猿の化け物を見つけて、それを退治する。宋代ですでに稀薄となつていた、猿が女に子供を産ませる話は後景に遠のき、異民族を象徴する猿との戦いが始まる。その際、隴西の李氏という出自は、唐室の出身氏

族であり、李德逢は異民族に象徴される猿と戦う漢民族の象徴として相應しい。明律が唐律を繼承したように、明において唐は規範とすべき「漢」民族國家であった。また、李德逢が、文言小説の主人公に多い、進士に合格するような文人ではなく、狩りの名人であったことも、猿に象徴される異民族と戦う者に相應しい。

第二は、猿退治の結果、報奨として三人の美女と娘の家の財産を手に入れることである。妻ではなく、關係性のない女を助けたので、その戦いには報奨が設けられる。そこには、異民族に象徴される猿の打倒に對する軍功の意が含まれよう。瞿佑（二三四一〜一四二七年）は、浙江省錢塘縣の人で、元への反亂が頻發しているころに生まれた。朱元璋が、張士誠から政權を奪つて江南を統一し、元を北方に追い、漢民族國家を復興するまでの動亂期が、瞿佑の少年時代に當たる。したがつて、瞿佑の『剪灯新話』には、混亂する社會情勢を背景とした作品も少なくない。『申陽洞記』に描かれた猿退治によつて報奨を得る話には、元末明初の異民族との戦いが反映している。

「申陽洞記」の特徴は、モンゴル族を漠北に追つた朱元璋の活躍を背景に、妻をさらわれた復讐としてではなく、所與の悪者である猿の退治により莫大な恩賞を得たことにある。猿は女に子供を産ませ、自らの子を残そうとするような種族を亂す存在ではなく、打倒をして褒美が與えられる対象である。異民族を驅逐すべしという社會通念に相應しいように、物語が展開されているのである。

五、守節の宣揚

明も後半になると、「女をさらう猿」の話は、さらなる展開を見せる。(明)洪梗の編んだ『清平山堂話本』卷三に、「陳巡檢梅嶺失妻

記」(以下、「失妻記」と略稱)という話がある。ただし、『清平山堂話本』に収録される話の多くは、宋代の瓦子に設けられた勾欄において、説話人の口から語られていた物語であるため、「失妻記」はすでに宋代において知られていた物語であつたとされる。それでも、文章化され読み物として出版されたのは、明代に入つてからであり、明代の社會状況を背景とすると考えてよい。

「失妻記」のあらすじを掲げよう。

北宋の宣和三年の春のこと。東京の陳從善は、兩親を早くに亡くした。幼いころから學問が好きで、歳は二十歳で武術にも優れていた。妻は張如春といい、歳は二八のとても美しい女性だつた。從善は科擧に合格し、進士となり、廣東南雄の沙角鎮の巡檢司に任命され、妻を伴つて任地に赴くことにした。從善はかねてより信心深く、僧侶や道士に供え物をしてきた。大羅仙界の紫陽真人は、從善の供え物をする様子を仙界より見て感嘆していた。

梅嶺の北には申陽洞という洞窟があり、そこには猿の妖怪が住んでいて、兄弟は三人、一人は通天大聖、一人は彌天大聖、一人は齊天大聖といい、妹も一人おり泗洲聖母といつた。三番目の齊天大聖は、神通力が廣大で、どんなものにも變化できる能力を持ち、美女を見つけると妖術を使つて洞窟の中に連れて來ていた。

齊天大聖は如春の美しい様子を見て、宿屋の主人に化けて如春をさらつた。從善は、懸命に行方を探したが見つからず、從者に「任地に到着してから再び探すが賢明です」と進言されて、仕方なく任地へ向かうことにした。

一方、誘拐された如春は、洞窟に連れて來られ、そこで牡丹と金蓮という二人の女性に出會う。二人ともやはり齊天大聖に誘拐

された女性だった。齊天大聖が如春に不老不死になる食べ物をすすめ、「身を委ねるように」と言うと、如春は「不老不死など望みません。いつそ早く死なせてください」と答えた。如春がふさぎ込んでいると、金蓮が如春のところへきて、「わたしは連れて来られて五年になるが、最初は嫌だった奴の顔にもやがて慣れて、今は楽しくやつている。ここを出る手立てはないのだから、齊天大聖の言うとおりにするのが身のためです」と言った。それを聞いた如春は、「古より、烈女は二夫を更えずと申します。わたしは今いつそ死んでも辱めは決して受けません」と答えた。そう言われ怒った金蓮は、齊天大聖にそれを言いつけた。齊天大聖は怒り、金蓮に、如春の髪をざんばらに切り落とし、裸足で水汲みをさせるように命じた。如春は、つらい水汲みも身を汚されるよりは良いと考え、耐え忍んだ。

從善は三年の任期を終え、紅蓮寺の旃大惠禪師に齊天大聖が恐れる相手は紫陽真人であると聞き、紫陽真人の力を借りて、如春を救出することができた。齊天大聖は紫陽真人に裁かれ、天牢に護送された。如春との再會を果たした從善は、長老と寺の僧侶に禮物を捧げて、故郷の東京に戻った。三年の間、貞節を守り抜いた如春は、從善と幸せに暮らし、夫婦ともに百歳まで生き、天壽を全うした。

「失妻記」が「申陽洞記」と異なる點は、さらわれる女が妻という設定に戻っていることである。妻をさらわれていなくとも猿の化け物と激しく戦った「申陽洞記」に對して、「失妻記」は、さらわれた妻を探し求める話に回歸している。ただし、夫の陳從善は、自ら戦うこととはない。異民族に象徴される猿との戦いは、すでに物語の主題では

ないのである。代わりに描かれるものは、當該時代の理想的男女像である。夫は、進士になって就いた巡檢司の職務を優先して、最愛の妻を探すことを後まわしにする。妻はそれに應え、三年もの間、貞節を守る。當然、猿の子供を宿す様子は描かれな²⁶い。

守節を貫く妻を助けて猿を退治する者は、紫陽真人である。紫陽真人とは、南宋以後、全眞の祖師として奉じられた北宋の張伯端のことである。²⁷紫陽真人の活躍は、三教融合の中で成立した全眞教が、儒教の影響の中で女性の守節を重視していたことの現れと考えてよい。また、「失妻記」の元となった南戲の「陳巡檢梅嶺失妻」では、紫陽真人は描かれず、猿を斬る者は主人であり、守節に關する記述もない。²⁸明代における守節の宣揚という社會風潮が、「失妻記」の守節の重視に反映していると見えよう。²⁹

一方、(明)陸粲の『説聽』に記される「女をさらう猿」の話では、さらわれた女は節を守ることができなかった。

弘治年間のこと、洛陽の民婦の阿周は、山に行つたとき猿の群れに遇い、捕まって洞中に連れて行かれた。老猿は(阿周を)妻にした。他の猿たちは老猿を敬い上下關係を亂すことはなかつた。毎日山で果實を探り糧とし、あるいは米粟を盗んできた。阿周は石を砕いて火を起こし、炊いてそれを食べた。一年餘りすると一子を産んだ。體は人で顔は猴で、わずかに毛があつた。いつも老猿に監視されていたので、逃げることはできなかった。ある朝老猿は目を病んだ。阿周は毒藥を拾い、與えて盲目にし、猴たちに乗つて(洞を)出て、かくて子を携えて逃げ夫の家に戻つた。吾が呉の民婦の邵氏は、太守の兒の乳史である。後に隨い洛陽に行つたとき、みずから阿周母子を見たとい³⁰う。

ここでは、猿にさらわれた女が、猿の子供を産み、その後、夫のもとに戻つて、子供を育てたことが記される。猿の子供を産むことは、唐の『白猿傳』以来の「女をさらう猿」の話の中では、例外的である。さらに、邵氏が「みずから阿周母子を見た」とあるように、「説聽」は、筆記小説（隨筆）であり、文言・白話小説よりは虚構性の低い読み物である。猿の子供を女が産んだことを「事實」と認識することの當否はさておき、女の守節に關しては、當該時代の意識をより正確に反映するものと考えてよい。明代には、北宋の程頤の「餓死はたいしたことではない。節を失うのは極めて重大なことである」（『程氏遺書』卷二十二下）という主張を受けて、とりわけ守節が宣揚された。「失妻記」において守節が強調される理由である。しかし、一方では族譜を分析した結果得られた現實の状況において、守節はそれほどまでの強制力を持つてはいなかった。そうした社會状況と阿周が民婦であったことが、節を守らなかつたことに批判的な言及を行わないという、陸粲の執筆態度に現れていると言えよう。また、ここでは、猿を退治するのは、さらわれた妻自身であり、夫が物語中で活躍することはない。自らを守るために主體的に行動する女が描かれることも、陸粲の執筆態度の特徴である。

このように、猿にさらわれた女が、節を汚されないよう奮闘する姿を取り入れた作品として、（明）凌濛初『初刻拍案驚奇』卷二十四「鹽官邑老魔魅色 會骸山大士誅邪」正話（「大士誅邪」と略稱）がある。あらずじは、以下の通りである。

明の洪武年間、仇氏という富豪に生まれた夜珠は頭も器量も良く、夫婦は立派な婿をとろうとした。あるとき、道士に化けた猿が夜珠を嫁に欲しいと申し出た。家柄はおろか、年齢も不釣り合

いの縁談なので、夫婦は憤慨し、道士を追い返した。

しばらくして、夜珠は道士にさらわれ、洞窟に連れて行かれた。洞窟に入るとすぐに道士と夜珠の婚禮が行われた。夜珠は恐ろしくて、仕方なく席にはついたものの、道士に祝いの酒を勧められても飲まず、そのうちに道士が酔つて寝てしまうと、父や母のことを思つて、ただ泣くばかりであった。道士の周りには夜珠の他にもさらわれてきた美しい女たちがいた。

道士がいないうちに、夜珠は女たちに、なぜあんな怪しげな奴のいいなりになつて身を委ねているのか、と尋ねた。すると、溜息をついて、「ここにさらわれてきて、両親とも夫とも別れ、もし朝晩悲しんでも、結局はどうにもならないので恥をしのんで生きていけるようなもの。あいつに逆らつてもどうにもならないので、運を天に任せて毎日を楽しく過ごした方がいいと思つています」と言つた。道士は、泣いているばかりの夜珠に怒り、「無理強いするつもりはなかつたが、このままならば力盡くで」と言つた。また、道士は何とかして夜珠をその氣にさせようと、夜珠に女たちとの戯れの場を見せ続けたが、夜珠の心はまったく動かかなかつた。

夜珠は泣くのはやめ、ただひたすら心の中で觀世音に救いを求め祈り續けた。一方、夜珠の両親も毎日、慈悲大士の像に祈り續けていた。ある日、會骸山の峯の上に旗竿が立ち、大勢が集つてきた。すると、一人の書生が、文筆のねたにするため、自分が確かめると申し出た。この若者は、劉徳遠といい、家柄もよく、學問もある人物だつた。行つてみると、洞窟があり、十數人の女たちがいて、眠っている者もいれば、じつと座っている者もいて、

まるでみな酒に酔っているかのようであった。また、その周りには大猿が數十匹、首を落とされて死んでいた。そして、麓から見えていた旗竿には、一匹の老猿の死骸が掛かっていた。劉徳遠は、仇家の娘が行方不明になったという文書を見たことがあったので、すぐに仇家に行つて、そのことを知らせた。夜珠は、他の女たちと一緒に救出され、無事、両親と再會することができた。

両親は大いに喜んだ。母は夜珠に、「戻つてくれただけでいい。たとえ身を汚されたとしても、それはどうしようもなかったことだ、おまえが自分を責める必要はないんだよ」と言つた。夜珠は、老猿を近寄らせなかったこと、また今日はいよいよ力盡くで身を汚されそうになつたが、大声で「靈感觀世音」と唱えたところ、天地が眞つ暗になり、氣がつくと猿たちはみな殺されていたことを告げた。猿たちを退治してくれたのは觀世音だと知り、両親と夜珠は心から觀世音に感謝した。

仇家は劉徳遠を婿にと望んだが、劉徳遠は辭退した。しかし、その後、縣の長官が媒酌人となり、強く勧めたので劉徳遠も承知し、仇家に婿入りして、夜珠を妻とした。やがて、劉徳遠は進士に合格し、夫婦は幸せに暮らした。夜珠の両親も長生きをし、夫婦同じ日にこの世を去つた。

「大士誅邪」の第一の特徴は、貞節の高さが強調されることにある。さらわれる女が妻ではないことは、「申陽洞記」と同じである。猿が道士の術を使うことは、『稽神錄』に見られる。すでに猿に身を任せられている淫婦が關係に誘うことは、「失妻記」と同じである。それに加えて、猿が女たちとの戯れの場を見せつけることで、守節を破らせようとするのが「大士誅邪」の新しさである。夜珠の守節の氣高さを

強調する表現と言えよう。

第二に、「大士誅邪」では、觀世音が猿を退治する。夫となる劉徳遠が自ら戦わないことは、「失妻記」と同じである。夫ではなく、觀世音に救われることが、「女をさらう猿」の話の中では新しい。六朝より始まり、明清時代にも盛んであつた觀音信仰の廣がりを見ることができよう。太田辰男によれば、『西遊記』の前身となる雜劇には、孫行者が好色の戒めとして觀音から悟空の法名を授かつたものがある、という。それとともに、孫行者の好色が、『博物志』以来の「女をさらう猿」の流れを繼承する「失妻記」の齊天大聖像の影響下にあることが分かる。

第三に、「大士誅邪」では、報奨を得たものが夫だけではなく、夜珠にも報奨が與えられている。「申陽洞記」では、猿を退治した李徳逢が、三人の美女と財産を得ていた。同様に、自ら戦わなかつた劉徳遠も、美女と財産を得ることになる。それ以上に、自らの貞節を守り觀世音への信仰で猿を撃破した夜珠は、進士に合格する劉徳遠を婿とし、夫婦と両親がみな幸せに暮らすことができた、という報奨を得ている。ここでは、明清時代に現れた女の自發的な貞節を守る意識が、報奨を得る要因とされている。かかる自發的な女の意識は、族譜に描かれた当該時代の理想的な女性像の姿の反映と考えられるのである。

おわりに

中國小説には、文言・白話の別を超えて繼承されるテーマを持つものがある。「女をさらう猿」の話は、その一つである。そうした際、猿が女をさらう、という構想に變化はないが、書き手が表現したい主題は異なる場合がある。その理由の一端は、書き手と読み手が共有す

る當該時代の社會通念が變容することに求められる。

「女をさらう猿」の話は、その時々々の社會通念を生み出す歴史的状況に應じて、物語が書き換えられてきた。

漢代に起源を持つ「女をさらう猿」の話は、西晉の『博物志』になると、漢民族と雜住しつづつあつた異民族への排斥の風潮を背景に、猿に異民族を象徴させて、猿が強制的に子供を産ませ、繁殖を圖ることを描き、異民族の同化に苦しむ漢族の思いを反映させる話となる。東晉の『搜神記』では、現實を反映して一定の融和が見られるものの、異民族への差別意識は繼承されていく。

唐の『白猿傳』は、異民族に對する差別意識が低いという唐代の社會通念を反映して、それまで異民族を象徴していた猿の産ませた子供を唐の代表的な書家の一人である歐陽詢と設定する。そこには、猿に象徴される異民族との混血種への社會的な許容がある。

宋の徐鉉『稽神錄』は、妻がさらわれているにも拘らず、その妻が猿の子供を宿す様子を描かず、ひたすら猿の打倒を表現する。そこには、異民族との戦いを背景に「華夷の別」を強く説く宋の時代性が反映している。

元末明初の「申陽洞記」は、モンゴル族を漠北に追つた朱元璋の活躍を背景に、妻をさらわれた復讐としてではなく、所與の悪者である猿の退治により莫大な恩賞を得たとする。猿は女に子供を産ませ、自らの子供を残そうとするような種族を亂す存在ではなく、打倒をして褒美が與えられる對象である。異民族を驅逐すべしという社會通念に相應しいように、物語が展開されている。

明代になると、「女をさらう猿」の話は、宋以降の猿退治の要素を保持しながらも、女性に守節という活躍の場を與え、その結果として

の大團円を描くものとなる。「失妻記」では、夫は、進士になつて就いた巡檢司の職務を優先して、最愛の妻を探すことを後まわしにする。妻はそれに應え、三年もの間、貞節を守る。「大士誅邪」では、自らの貞節を守り觀世音への信仰で猿を撃破した夜珠は、進士に合格する劉德遠を婿とし、夫婦と兩親がみな幸せに暮らしていく、という報奨を得る。ここでは、明清時代に現れた女の自發的な貞節を守る意識が、報奨を得る要因とされている。かかる自發的な女の意識は、族譜に描かれた當該時代の理想的な女性像の姿の反映と考えられる。

このように「女をさらう猿」の話は、その時代背景に應じた展開をみせる。小説は、單なる虚構ではなく、その時代を生きる人々の思いを反映することで、多くの作品を生み出すと共に、人々の需要に應じていった。そのような中國小説の特徴の一つが「女をさらう猿」の話の展開に現れているのである。

注

(1) 孫悟空の源流を探るものは、中野美代子の『西遊記』XYZ—このへんな小説の迷路をあるく』（講談社、二〇〇九年）などの一連の研究のほか、磯部彰『西遊記』形成史の研究』（創文社、一九九三年）などがある。

(2) 仙石知子「明清小説に描かれた不再娶」（『東方學』一一八、二〇〇九年、『明清小説における女性像の研究』汲古書院、二〇一一年に所収）を参照。

(3) 富永一登『中國古小説の展開』（研文出版、二〇一三年）。

(4) 南山大猷、盜我媚妾。怯不敢逐、退然獨宿。（『焦氏易林』卷一 剝）。『焦氏易林』は、四部叢刊本を底本とした。

- (5) 蜀(山)《中》南高山上、有物如獼猴。長七尺、能人行健走。名曰猴獼、一名(馬)化、或曰猴獼。(同)(伺)行道婦女有好事者、輒盜之以去、人不得知。行者或每(過)《過》其旁、皆以長繩相引、然故不免。此得男(女)「子」氣自死、故「不」取男也。取去爲家室。其年少者、終身不得還。十年之後、形皆類之、意亦迷惑、不復思歸。有子者、輒俱送還其家。產子皆如人。有不食養者、其母輒死。故無「不敢」(敢不)「養也」(乃)「及」長、與人不異。皆以楊爲姓。故今蜀中西界多謂楊、率皆猴獼馬化之子孫、時時相有攫爪也。(『博物志』三「異獸」)。『博物志』は、范寧(校注)『博物志校證』(中華書局、一九八〇年)を底本とし、校勘に従い、省く文字を()で、加える文字を()により示した。また、赤堀昭(他補注)『博物志校箋』(『東方學報』京都五九、一九八七年)に従った部分は、底本を()で示し、『博物志校箋』の文字を《 》により示した。
- (6) 「猿」には、さまざまな呼稱がある。それについては、中野美代子「孫悟空の誕生―サルのみ話學と『西遊記』」(岩波書店、二〇〇二年)「II サルののみ話學」参照。
- (7) 渡邊義浩「張華『博物志』の世界觀」(『史滴』三七、二〇一五年)。
- (8) 蜀中西南高山之上、有物與猴相類。長七尺、能作人行、善走逐人。名曰猴國、一名馬化、或曰猴獼。伺道行婦女有美者、輒盜取將去、人不得知。若有行人經過其旁、皆以長繩相引、猶故不免。此物能別男女氣臭、故取女、男不取也。若取得人女、則爲家室。其無子者、終身不得還。十年之後、形皆類之、意亦迷惑、不復思歸。若有子者、輒抱送還其家。產子皆如人形。有不養者、其母輒死。故懼怕之、無敢不養。及長、與人不異。皆以楊爲姓。故今蜀中西南多謂楊、率皆是猴國、馬化之子孫也。(『搜神記』卷十二「猴國馬化」)、『搜神記』は、汪紹楹(校注)『搜神記』(中華書局、一九七九年)を底本とした。
- (9) 東晉における佛教の受容と異民族觀については、鎌田茂雄「中國佛敎史」第二卷(東京大學出版會、一九八三年)。「春秋穀梁傳」が他の二傳に比べて異民族との融和に特徴を持つことについては、渡邊義浩「兩漢における春秋三傳の相剋と國政」(『兩漢における詩と三傳』汲古書院、二〇〇七年)、『後漢における「儒敎國家」の成立』に所収)を参照。
- (10) (唐)段成式の『酉陽雜俎』には、爪の記述を含む「女をさらう猿」の話が収録されるが、『博物志』を踏襲、簡略化したものと見てよいであろう。
- (11) 成行正夫「白猿傳」の系譜(『藝文研究』三四、一九七五年)を参照。
- (12) 内田道夫「中國小説研究」(評論社、一九七七年)は、『白猿傳』の展開を追い、六朝小説から唐代小説への過渡期と位置づける。小南一郎『唐代傳奇小説論―悲しみと憧れと』(岩波書店、二〇一四年)は、唐代初期の成立とする理由を稚拙な文體に求める。
- (13) 原文は、「東向石門」。成瀬哲生「古鏡記・補江總白猿傳・遊仙窟」中國古典小説選4唐代I(明治書院、二〇〇五年)は、「岩窟の出入り口が東向きである。東向きとは少數民族の文化(神話・傳説)と關係があると思われる」と注を付けている。
- (14) 中野美代子「孫悟空の誕生」(前掲)は、歐陽詢を中傷するために書かれたとする。これに對して、乾一夫「補江總白猿傳論―その創作動機・目的論をめぐる管見」(『國學院雜誌』七一―九、一九七〇年)、成行正夫「白猿傳」の系譜(前掲)、松崎治之「唐代小説『白猿傳』小考」(『筑紫女子短期大學紀要』二八、一九九三年)などは、中傷説を否定する。その他の『白猿傳』に關する研究については、西川幸宏「サルのみ類婚姻譚と『白猿傳』」(追手門學院大學『アジア學科年報』一、二〇〇七年)の整理を参照。
- (15) 渡邊孝「牛羊日曆」作者考(『中華世界の歴史的展開』汲古書院、

- 二〇〇二年)。
- (16) 隋唐が鮮卑により建國されたことは、陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』(中華書局、一九六三年)、『唐代政治史述論稿』(中華書局、一九七四年)などを参照。また、漢族の「民族主義」が強い宋・明などの「小中國」に對して、唐を嚆矢とする「大中國」が、種族・出身を問わない世界宗教の佛教を重視するなど、異民族に對する差別意識が低いことについて、妹尾達彦『長安の都市計畫』(講談社、二〇〇一年)を参照。
- (17) 成行正夫「白猿傳」の系譜(前掲)は、「白猿傳」以後の小説がいずれも白猿の子供を産むという結末を描いていない理由について、「當時の社會的情況もあげられるかもしれないが、主な理由は小説の作者が人間と異類との婚姻というものに對して實在性を疑うようになったか、嫌悪感を抱くようになったためであろう」と述べるが、首肯し得ない。
- (18) 晉州含山有妖鬼、好竊婦人。嘗有士人行至含山、夜失其妻。旦而尋求、入深山。一大石洞、有五六婦人共坐、問曰、君何至此。具言其故。婦人曰、賢夫人昨夜至此。在石室中。吾等皆經過爲所竊也。將軍竊人至此、與行容彭之術。每十日一試、取素練周纏其身及手足、作法運氣、練皆斷裂。每試輒增一疋。明日當五疋、君明且至此伺之。吾等當以六疋念纏其身。候君至即其殺之可乎。其人如期而往、見一人貌甚可畏。衆婦人以纏至六疋、乃直前格之、遂殺之、乃一老猿也。因獲其妻、衆婦皆得出。其恠乃絕。(『稽神錄』卷之十二 老猿竊婦人)。「稽神錄」は、字句の異同が多く、本稿は『類說』卷十二に收められた本に依據した。
- (19) 黨項羌者、三苗之後也。其種有宕昌・白狼。皆自稱獼猴種。(『隋書』卷八十三 西域 黨項傳)。なお、すでに内山知也『補江總白猿傳』考(内野博士還曆記念『東洋學論集』一九六四年)が、黨項人が獼猴の子孫と稱していたと指摘している。
- (20) 靜江府疊綵巖下、昔日有猴、壽數百年、有神力變化、不可得制。多竊美婦人。歐陽都護之妻亦與焉。歐陽設方略殺之、取妻以歸、餘婦人悉爲尼。猴骨葬洞中、猶能爲妖。向城北民居、每人至、必飛石。惟姓歐陽人來、則寂然、是知爲猴也。……(『嶺外代答』卷十 志異門「桂林猴妖」)。「嶺外代答」は、楊武泉(校注)『嶺外代答校注』(中華書局、一九九九年)を底本とした。なお、西川幸宏「サル」の異類婚姻譚と「白猿傳」(前掲)によれば、この故事は「白猿傳」より民間傳承に近く、「白猿傳」の原話とみる研究者もいる、という。
- (21) 中野美代子「孫悟空の誕生」(前掲)による。また、中野は、歐陽都護とは、歐陽紇のことではなく、唐初に安南都護に任じた歐陽普贊のことを指す、としている。なお、歐は、「なぐる」「追い立てる」という意味であり、「猿」を象徴する「楊」に通ずる「陽」を「毆」る者が「歐陽」氏であった可能性を持つ。
- (22) 瞿佑と『剪灯新話』に収録された物語の傾向については、竹田晃・小塚由博・仙石知子『剪灯新話』中國古典小説選8(明治書院、二〇〇八年)「解説」参照。また、尾崎保子「補江總白猿傳」から「申陽洞記」へ一文言小説の文學的限界について(昭和女子大學「學苑」六八一、一九九六年)は、「申陽洞記」と「白猿傳」の比較を行っている。
- (23) たとえば、元に成立した『三國志平話』は、匈奴族の劉淵が蜀漢を繼承する物語とされ、モンゴル人の元もまた、同様に南宋を繼承できるとされていた。これに對して、モンゴルを打倒した明で描かれた『三國志演義』では、この結末が削除されていることについては、金文京『三國志平話』の結末についての試論(狩野直禎先生傘壽記念 三國志論集「三國志學會、二〇〇八年)を参照。
- (24) 「失妻記」は、(明)馮夢龍の『古今小説』卷二十に、「陳從善梅嶺失渾家」として收められている。『古今小説』は、記述の不整合を修正し、詩を加除するなど表現に異同がある。

(25) 岡本不二明「宋代話本『陳巡檢梅嶺失妻記』の再検討」(『宋代の規範と習俗』汲古書院、一九九五年)は、中野美代子・磯部彰らの南宋成立説を批判し、元末明初以降の成立としている。

(26) 中野美代子『孫悟空の誕生』(前掲)は、「白猿傳」では女が猿の子供を産むのに、「失妻記」では産まなくなった理由について、猿側の變化による、とする。晋の王嘉『拾遺記』巻八には、白猿が神仙に化したという話があり、賦でも晋の傅玄『猿猴賦』・唐の吳筠『玄猿賦』・唐の李德裕『白猿賦』などのように猿をテーマにするものが多い。「失妻記」に登場する猿は「猴」であって「白猿」ではない。神仙にも化すことのできる白猿であれば、身をまかすことも許されようが、ありふれた猴ならば許されない、というのが「失妻記」の作者の考えであった、とするのであるが、首肯し得ない。なお、中野は、「失妻記」の猿が齊天大聖と名乗り、兄二人に妹が一人いることは、戯曲『西遊記』を想起させるもので、「失妻記」が『西遊記』成立の上で深い関係を持つとしている。

(27) 易學者としても著名な張伯端に關する先行研究の整理に、吾妻重二「張伯端『悟真篇』の研究史と考證」(『東洋の思想と宗教』一一、一九九四年)がある。

(28) 錢南揚『宋元南戲百一錄』(哈佛燕京學社出版、一九三四年)に依った。

(29) 明代において守節が宣揚されていたことについては、注(二)所掲仙石著書を参照。また、明代における猿を主題とする物語は、ここで扱った齊天大聖と稱する孫悟空が活躍する『西遊記』が有名である。本稿は、「女をさらう猿」に焦點を當てたため、齊天大聖の物語のうち「守節」との関係性を論じた。成行正夫「孫悟空と白猿傳説」(『藝文研究』三四、一九七五年)は、「失妻記」は猿の精が人間の妻を奪う白猿傳説の物語であって、「西遊記」とは何の関係も持たない、という。しかし、『博物志』以來の「猿」が持っていた西方の異民族という象徴性と、西域を主

たる舞臺とする『西遊記』との關わりについては、再考の必要があろう。

(30) 弘治間、洛陽民婦阿周、山行遇群猴、執歸洞中。一老猴妻之。群猴事不敢犯。日採山果爲糧、或盜得米粟。周敲石取火、炊食之。歲餘生一子。人身猴面、微有毛。恆爲老猴守視、不得脫。一旦老猴病目。周拾毒藥、傳而旨之、乘羣猴出、遂携子逃回夫家。吾吳民婦邵氏、乳史太守兒。後隨至洛、親見阿周母子。

(31) 『夷堅支景』丙卷六 道州侏儒に、猴と交わり侏儒を産む女の話が収録されるなど、猿の子供を産む女の話が皆無となるわけではない。岡本不二明「宋代話本『陳巡檢梅嶺失妻記』の再検討」(前掲)を参照。

(32) 仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』に描かれた女性の義と漢への義―貂蟬の事例を中心として」(『狩野直禎先生傘壽記念三國志論集』三國志學會、二〇〇八年)を参照。

(33) また、澤田瑞穂『中國の動物譚』(弘文堂、一九七八年)によれば、民間の口頭傳承には、「猴娃娃」型と呼ぶべき、猿にさらわれた女が子供を産み、隙を見て家に逃げ歸るが、猿が女の産んだ小猿を抱いて、小猿の母を求めて訪れる哀話が多い、という。『説聽』は、そうした「民」の傳承を聞き書きしたもので、それが猿の子供を産むという例外性に繋がっていると考えられる。

(34) 作品の本事については、小川陽一『三言二拍本事論考集成』(新典社、一九八一年)を参照。

(35) 觀音の名を唱えて救われる話は、たとえば『夷堅甲志』卷十 佛還鈔などに見える。なお、『夷堅志』は、何卓(點校)『夷堅志』(中華書局、一九八一年)に依った。

(36) 六朝時代の觀音信仰については、牧田諦亮『六朝古逸觀世音應驗記の研究』平樂寺書店、一九七〇年)を参照。また、明清時代に女性が觀音と稱して祕密結社を組織したことについては、小林一美「叛逆の女首

領となった女性たち」(『結社が描く中國近現代』山川出版社、二〇〇五年)を参照。

(37) 太田辰夫『西遊記の研究』(研文出版、一九八四年)。

(38) 磯部彰『西遊記』資料の研究』(東北大學出版會、二〇〇七年)は、『大唐三藏取經詩話』の猴行者の直接的下地は、主としては西湖の呼猿洞の白猿行者傳説や密教の護法神將に當てられる「獼猴」が持つ諸要素から、その前身が形成された……『補江總白猿傳』などの宋以前の志怪小説・傳奇小説などの資料にあらわれる「野猿」とは、一線を畫す必要があろう、と述べている。しかし、觀音と猿との關わりまで續く「女をさらう猿」の物語の系譜が持つ『西遊記』への影響を無視することはできないと思われる。

(39) 前近代中國の女性が、儒教理念を内在化させるような社會構造の中で、自らの生の證を近代的な「自由」にはなく、儒教規範に求め、節を守るために自發的な行動をとったことについては、仙石知子「明清女性史研究と毛宗崗本『三國志演義』」(『中國—社會と文化』二九、二〇一四年)を参照。

(40) 仙石知子「中國女性史における孝と貞節—近世譜にあらわれた女性觀を中心に」(『東アジアにおける「家」—傳統文化と現代社會』大東文化大學、二〇〇八年、『明清小説における女性像の研究』汲古書院、二〇一一年に「孝と貞節」と改題のうえ所収)。